

4. 藻場の生きもの

もば かいそう
藻場は、大型の海藻（海草）でつくられる「海の森」を指します。藻場は多様な生きものを守り育てる場所として大切な役割を果たしています。

「藻場」は「海のゆりかご」



山陰海岸の藻場のようす

海の森をつくる海藻たち

ホンダワラ類 ホンダワラ類は、茶色の海藻（褐藻）、ホンダワラ科の総称で、根（付着器）・茎・主枝・葉・気胞をもち、見た目が陸上植物に似ています。最も大きな特徴は気胞を持つことで、気胞は効率よく太陽の光を浴びようと海の中で直立するために不可欠なものです。ホンダワラ類で構成される藻場は「ガラモ場」と呼ばれ、山陰海岸には豊かなガラモ場が広がっています。

アカモク（ホンダワラ科）
Sargassum horneri



かがや
海中で黄金色に輝く。細長い気胞が特徴。人気の食用海藻。

ヤツマタモク（ホンダワラ科）
Sargassum patens



大きな気胞と平たい主枝をもつ。春先はモズクがよくつく。

ウミトラノオ（ホンダワラ科）
Sargassum thunbergii



浅い磯場に生育。体が小さい時は、トラのしっぽのような形をしている。

イソモク（ホンダワラ科）
Sargassum hemiphyllum



浅い磯場で広大な藻場をつくる。岩を匍うような根（付着器）となぎなた状の葉が特徴。

ナラサモ（ホンダワラ科）
Sargassum nigrifolium



波あたりの強い浅い岩場に生育する。丸い葉っぱが特徴。

ヨレモク（ホンダワラ科）
Sargassum siliquastrum



細身のギザギザした葉が特徴。浦富海岸で最もよく見かける藻場の構成種。

その他の森をつくる海藻・海草

クロメ（Lessoniaceae（科））
Ecklonia kurome



コンブのなかま。葉にシワがある。アワビやサザエのエサとなる。

ワカメ（チガイソ科）
Undaria pinnatifida



春先に最も大きくなり、「めがぶ（根元のできる生殖器官）」が発達する。



エビアマモ（アマモ科）
Phyllospadix japonicus

海草のなかま。多くの海草は砂泥域に生育するが、この種類は浅い岩場に生育する（P49参照）。

魚類

メバル属のなかま (メバル科)
Sebastes spp.



クリクリとした大きな眼が特徴。春から夏にかけて、稚魚の群れが観察される。「アカメバル」・「クロメバル」・「シロメバル」の3種類が存在するが、山陰海岸では詳しい調査が行われていない。

ヨウジウオ (ヨウジウオ科)
Syngnathus schlegelii



体が細長く、眼から口の部分も長い。尾びれは比較的大きい。細い体は海藻の枝とよく似ていて見つけるのが難しい。

カワハギ (カワハギ科)
Stephanolepis cirrhifer



初夏から秋にかけて、体長5cmほどの幼魚が観察される。色彩に変異が多い。

アミメハギ (カワハギ科)
Rudarius ercodes



カワハギよりも小さく、成魚でも5cmほど。体の網目模様が特徴。夜には海藻をくわえて眠る。

ダンゴウオ (ダンゴウオ科)
Lethotremus awae



体長3cmほどの小さな魚で、冬から春先のみ浅い岩場で観察される。吸盤状に変化した腹びれで、海藻や岩に張りついて生活する。

アイゴ (アイゴ科)
Siganus fuscescens



夏から秋にかけて幼魚が群れで海藻を食べるようすが観察される。近年、アイゴによる食害が藻場の衰退に大きな影響を及ぼしている。



アイゴが海藻を食べるようす

観察してみよう! ⑧

身近な海の人気者「タツノオトシゴ」

タツノオトシゴはとてもユニークな姿をしています。マアジやマグロと同じ魚類です。体長は10cm前後で、海藻などに長い尾を巻きつけてじっとしていることが多く、体の色も周りの岩や海藻の色に似せているため、簡単には見つけれません。水中マスクを通して、岩の上や海藻の根元などをじっくりと観察することが発見のポイントです。タツノオトシゴはオスが子ども(赤ちゃん)を“出産”する魚としても知られています。春先から初夏にかけての繁殖期には、メスがオスのお腹にあるポケット(育児嚢)の中に卵を産み落とし、オスがそのポケットの中で卵を育てます。外敵に見つからないように真夜中の海中で、オスは卵からふ化した子どもたちを次々と放出します。オスが体全体の力を振りしぼって“出産”する姿はとても感動的です。



タツノオトシゴ (ヨウジウオ科)
Hippocampus coronatus



オスの出産のようす

ウニのなかま（棘皮動物）

ムラサキウニ（ナガウニ科）
Heliocidaris crassispina



山陰海岸の磯場で一年を通してよく観察される。こぶし大のものが多い。海藻を食べる。

アカウニ（オオバファンウニ科）
Pseudocentrotus depressus



ムラサキウニと比べてトゲが短く、全体が赤褐色。他のウニ類と同じで、海藻を食べる。

巻き貝（アメフラシのなかまを含む）・イカのなかま（軟体動物）

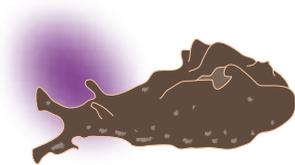
アメフラシ（アメフラシ科）
Aplysia kurodai



黒褐色の体に白い斑点があり、つついて刺激すると紫色の液体を出す。春先にカラフルな糸状の卵塊を海藻に産みつける。



アメフラシの卵塊



ミドリアメフラシ（アメフラシ科）
Aplysia oculifera

巨大化するアメフラシより、やや小型。うすい黄緑色から暗褐色の体に黒く縁取られた白点が散在する。



クロヘリアメフラシ（アメフラシ科）
Aplysia parvula

体長5cmほどの小型種。背中の側足のへりが黒く縁取られる。

サザエ（サザエ科）
Turbo cornutus



貝殻の大きさはこぶし大ほどで、浅い岩場の海藻の茂る場所に生息する。

クロアワビ（ミミガイ科）
Haliotis discus discus



貝殻は平たい長円形。夜行性で昼間は岩かげに隠れている。主にコンブのなかまをよく食べる。

アオリイカ(ヤリイカ科)
Sepioteuthis lessoniana



胴体部分の長さ(胴長)が40cmほどになる大型のイカ。春先から初夏にかけて藻場に卵を産みつける。夏から秋にかけては胴長10cm前後の若イカの群れが観察される。



産卵のようす

観察してみよう! ⑨

砂をまぶして大切な卵を守る「コウイカ」

胴の中にかたい甲らをもつコウイカは、春先から初夏にかけて、繁殖のために浅場にやってきます。繁殖期にはオスとメスがペアで一緒に泳ぐ姿が観察されます。コウイカのメスは、オスから精子のカプセルを受け取った後、腕を使って一粒一粒でいねいに卵を海藻に巻きつけていきます。それぞれの卵に砂をまぶして目立たなくすることで、外敵から卵を守る工夫をしています。約1ヶ月で卵からふ化した稚イカは、すぐに自分で餌をつかまえて成長し始めます。翌年の春には繁殖のためにまた浅場にやってきて、子孫を残した後、約1年の短い寿命を終えるのです。



産卵のようす



卵



ふ化直後

コラム③ 山陰海岸のカモメたち

カモメのなかまは波打ち際や防波堤の上などでよく見かける、身近な野鳥です。海岸や港に行くと、まだ茶色の羽が残る若鳥も含めた数十羽の群れに出会えます。この群れは1つの種類で成り立っているように見えますが、よく見ると何種か混ざっている



ウミネコ(手前)・セグロカモメ(奥)

ことが多いです。夏の山陰海岸では、おもにオオセグロカモメとウミネコの2種を見ることができ、冬になるとさらにセグロカモメが加わります。

これらのうち、ウミネコは他の2種よりもずっと小さいため、並んでいるときはすぐに区別がつかます。また1羽でいるときでも、足の色で見分けることができます。ウミネコの足の色は黄色で、セグロカモメのなかまはピンク色です。ほかにも、成鳥のくちばしの先はウミネコだと上下とも口紅を塗ったように赤く、セグロカモメのなかまだと下側だけが赤いという違いがあります。この赤い部分にはヒナ鳥が親のくちばしをつつく行動を引き起こす効果があります。これはヒナが生まれながらにして、くっきりした赤い模様をつつく性質を持っているためです。つつかれた親は食べた餌を吐き戻してヒナに与えるため、赤い部分は小さいながらとても重要な役割を果たしているのです。



オオセグロカモメ

この赤い部分にはヒナ鳥が親のくちばしをつつく行動を引き起こす効果があります。これはヒナが生まれながらにして、くっきりした赤い模様をつつく性質を持っているためです。つつかれた親は食べた餌を吐き戻してヒナに与えるため、赤い部分は小さいながらとても重要な役割を果たしているのです。

カモメたちは私たちの身近なところにいる鳥ですので、細かな部分の色の違いやその役割を知ると、もっと親しみが湧いてくると思います。海辺でカモメの群れを見かけたら、ぜひじっくり観察してみてください。



砂浜の足あと

(朝日新聞「生きもの通信 山陰海岸から(2014年4月1日掲載)」を一部改変)